研究課題　承久の乱関係史料の基礎的研究

研究経費　六六万七五一〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　長村祥知（京都府京都文化博物館 〈五月まで〉、富山大学〈六月より〉）

　所内共同研究者　木下竜馬・藤原重雄・堀川康史

　所外共同研究者　梅沢 恵（神奈川県立金沢文庫）・小倉嘉夫（大阪青山歴史文学博物館）・西谷功（泉涌寺宝物館心照殿）・貫井裕恵（神奈川県立金沢文庫）・山岡 瞳（京都府立大学）・渡邊浩貴（神奈川県立歴史博物館）

研究の概要

（１）課題の概要

　承久の乱とは、承久三年（一二二一）五月、後鳥羽院が鎌倉幕府執権 北条義時の追討を命じるも、上洛した鎌倉方武士に京方武士が合戦で敗北し、後鳥羽を含む三人の上皇が遠方に流された事件である。その研究は長く停滞していたが、近年になって研究書や新書が相次いで刊行されるなど、社会の関心も高まりつつある。  
　本研究課題では、この承久の乱に関する史料を幅広く調査した同題の昨年度共同研究の成果を公表するとともに、さらなる原本調査を進め、いくつかの史料については詳細な調査成果の公表を計画する。  
　かつて承久の乱研究が停滞していた一因は関連史料が限られていたことにあった。その数少ない史料も、『大日本史料』や『大日本古文書』といった先駆的な翻刻に依拠してきたため、かえって史料の原本に即した研究が十分ではない。承久の乱研究を中核として、今後の関連諸課題の基礎となるための、個々の史料に即した研究資源化を進めたい。

（２）研究の成果

　本課題の共同研究員の専門分野は、日本中世の政治史・法制史・宗教史・対外交流史・文学史・絵画史や日本近世の文学史といった諸分野にまたがる。その強みを活かして、古文書・古記録のみならず、古典籍・聖教・絵巻といった様々な歴史的諸史料の原本・実物の調査を進め、後鳥羽院と鎌倉幕府、承久の乱について政治・社会・文化など多角的な視角から検討を加えた。  
　また感染症の広まりを注視して当初予定を柔軟に見直し、一部の史料については出張の代替として画像データを入手した。  
　主要な成果として、以下の点が挙げられる。  
・仁和寺が所蔵する日次記について、調査を進めた。  
・金沢文庫所蔵・管理（称名寺所蔵）史料の画像データおよび明治大学所蔵史料の画像データを入手した。これらのデータは、所蔵機関の許可条件を遵守して今後の研究にも利用する。  
・一九三九年に恩賜京都博物館（現京都国立博物館）で展示された後、所在不明となっていた「承久記絵巻」全六巻（個人蔵。二〇二一年六月からは寄贈により龍光院蔵〈高野山霊宝館寄託〉）の写真版による調査を進めた。